

介護職員自己評価表

2023年8月8日

事業所名	定期巡回・随時対応型訪問介護看護きいれ (日常的・継続的な医学管理担当チーム)		
		介護支援専門員	正社員
		認定特定行為業務従事者	非常勤社員
		介護福祉士	
		実務者・初任者研修 看護師	

※複数資格者含む

◆前回の改善計画に対する取組み状況

個人チェック項目	よく できている	なんとか できている	あまり できていない	ほとんど できていない	備 考
前回の課題に関する改善	1. 8%	77. 3%	12. 7%	8. 2%	

前回の改善計画	定期巡回・随時対応型訪問介護看護事業所として、日常的・継続的な医学管理が必要なご利用者に認定特定行為業務従事者が在宅支援をしている。居住系施設で暮らすご利用者が多くを占めるが、在宅で暮らすご利用者もあり、心身の状態変化を把握するうえで、全てのご利用者にシート型体振動計を無償貸出し、測定データに基づいた支援を行っている。新型コロナの位置づけが2類相当から5類に移行し、人的交流は復活しているが、感染対策の徹底は引き続き問われており、症状を踏まえた医療連携は重要になっている。バイタルサインの変化を見極めた素早い医療連携が求められ、発熱等の症状に応じてPCR検査および抗原検査を速やかに行い、感染予防の徹底を図る計画とした。適切な医療連携を行なうにあたり、介護・看護職だけでなく、理学療法士を巻き込んだ多職種が参加するカンファレンスを計画した。
前回の改善計画に対する取組み結果	ご利用者とそのご家族の同意を得て、主治医にバイタルサインを連携する仕組みとし、発熱等の症状により迅速に検査が実施できる体制にした。自らの訴えができないご利用者では、心拍・呼吸状態に合わせて、睡眠関連データを活用し心身の健康状態を判断した。カンファレンスは介護士・看護師・理学療法士の多職種で行ったことで、バイタルサインに加えて訪問時の状態を主治医に連携できるようになった。一方、多職種による移乗補助具を用いたノーリフトケアの検討など、利用者だけでなくスタッフの負担軽減に向けた機器導入、スタッフミーティングの位置付けやあり方についても検討すべきであった。

◆今回の自己評価の状況

確認のためのチェック項目(偏差値)		よく できている (60以上)	なんとか できている (50～59)	あまり できていない (40～49)	ほとんど できていない (39以下)	合 計
SECTION 1	対象者の接し方や態度について	10. 0%	70. 0%	20. 0%	0. 0%	100%
SECTION 2	仕事上の態度について	0. 0%	90. 0%	10. 0%	0. 0%	100%
SECTION 3	食事について	0. 0%	70. 0%	20. 0%	10. 0%	100%
SECTION 4	移乗や移動について	0. 0%	80. 0%	10. 0%	10. 0%	100%
SECTION 5	排泄について	0. 0%	70. 0%	20. 0%	10. 0%	100%
SECTION 6	入浴について	0. 0%	80. 0%	10. 0%	10. 0%	100%
SECTION 7	着替えや整容について	0. 0%	80. 0%	10. 0%	10. 0%	100%
SECTION 8	服薬について	0. 0%	70. 0%	20. 0%	10. 0%	100%
SECTION 9	意思疎通について	10. 0%	70. 0%	10. 0%	10. 0%	100%
SECTION 10	行動障害について	0. 0%	90. 0%	0. 0%	10. 0%	100%
SECTION 11	普通の生活やアクティビティについて	0. 0%	80. 0%	10. 0%	10. 0%	100%

自己評価及び改善が必要な事項	感染リスクは高まり、インフルエンザ・ウイズコロナの中での支援を検討し、バイタルサイン等の心身の状態変化を速やかに医療連携する仕組みを構築した。一方、心身の変化だけでは分からないことも多く、たとえば、熱っぽさや倦怠感を訴え、体温はやや高く、インフルエンザやコロナ感染が疑われ、主治医に連携し検査に繋いだものの、結果は違っていたことも稀にあった。課題は、風邪・インフルエンザ・新型コロナウイルスを区別することが難しく、バイタルサインは機器や測定法で異なることであった。測定機器を変え、検温する部位を腋下にするなど、正しい測り方や再測定の仕方を統一し、正しい情報を素早く共有することで、その後の支援を選択する必要があった。多職種カンファレンスを定期的に行ったことで、医療機関との情報共有、体調変化の管理、水分の摂取量と褥瘡対策等が強化された。スタッフ教育は、看護師・理学療法士を交えた実践的な勉強会を定期的に行い、バイタルサインを活かした適切な連携を目指した。
主任 畠田美香	

外部評価者	定期巡回・随時対応型訪問介護は、要介護状態の方に、日中、夜間を通じて訪問介護と訪問看護を一体的に提供するサービスです。定期的な巡回支援、随時通報による訪問支援により緊急時の対応をする、地域包括ケアシステムの中核的な役割を担っています。こちらの事業所は、日常的・継続的な医学管理が必要な対象者が多く医療連携は欠かせません。介護・看護職員は、長い実務経験がある認定特定行為業務従事者や看護師が担い、医療機関や主治医と迅速な連携をおこない適切な医療につなげていました。概ね安定した支援を高いレベルで提供していました。医療連携は、対象者と家族の同意を得て、医療機関とバイタルサインを共有する仕組みを導入していましたが、バイタルサインの測り方に課題があるようでした。非接触の体温計で平常時と違いがあった場合、脇の下で再検温しています。脇の下は、こもり熱、汗ばみ、隙間やあたる部位など、違いを生じさせる要因があります。さらに、何回も測定すると体温計本体もあたたまります。事業所内で統一した流れを検討すべきかもしれません。職員教育において、その日の課題をその日に解決する検討がおこなわれチームワークは強まっていました。一方職員ミーティングについては、頻度を高めて実施し、スーパービジョンを検討する必要がありますようでした。総合的な評価は、医療と介護が連携し支援を行っている様子が推察されました。これからも地域に根ざした事業所として頑張ってください。
〒891-0141 鹿児島市谷山中央5丁目37-11-362 特定非営利活動法人かごしま福祉開発研究所 社会福祉学博士 田中安平	

